

和を考える

「子曰く、君子は和して同せず。小人は同

じて和せず」

【子路】

【子曰、君子和而不_レ同。小人同而不_レ和】

〈孔子いう、君子は自分勝手なところが無いから、それぞれに強みを活かしてそれらを合わせて道理にしたがい一つに溶け合うことができるが、自分に一定の見識(物事を正しく見通し、本質を見分け、判断力や考えが無く、道理に反したことにわけもなく賛成し行動することは無い。小人は自分勝手な面が強かったり或いはあまり物事を考えないので、利を見ては付和雷同しやすくなったりただ単に言われるままに同調して、道理に従って和する)ことがない。〉

私は、この度のワールドカップで日本チームの戦い方をみて、この章句が頭に浮かびました。

ベスト8には残れなかったけれど、予選リーグには、ワールドカップで優勝経験あるドイツやスペインに逆転勝ちして予選リーグトップで勝ち残りました。

これを書いている今日は、惜敗した日の早朝ですが、これまで多くを学ぶことができました。森保監督や吉田キャプテン始め多くの選手の言葉に多くの学びがありました。

それは、「まず、若く口数少ない選手でも、自分の考え、意見を言える雰囲気は監督はじめベテラン選手も含めて作っていることです。そこで、一人一人がしっかりと考えをもち、自分の強みを活かし弱みを補強するため主体的に自分の体力・筋力・技術を磨くだけでなく、それをチーム内で言うことができるので素直なコミュニケーションができて、真の和のあるチームワークができたのだとおもいました。その上で、新しい景色をみるため、出場していなくても妬むことなく憎むこともなく、ベンチにいようと出場していようとその時の自分の役割をしっかり果たし一丸となつて戦っていたように思えます。だから、堂安選手や浅野選手、あるいは三苫選手のような劇的なプレーは生まれたんだと思います。監督は、「前半の選手が作った流れが引き継がれ後半の得点につながった」と言われていました。これらを支えたのは、もちろん、応援者とともに、出場していてもしていないかでもわだかまりなく自分の意見を持ち、出し合いながらも支え合い親しみとする心をもったスタッフ含めチームができないとできないのではないか、と思います。

そういえば、女子ワールドカップで優勝したあの時の日本チームも、一人一人の力は対戦相手になかなかつたように見えました。和のチームワークで見えない力を発揮していたように思いました。

ちなみに、複雑系の科学ということがあります。一を十一プラスした和は、十一とイクオールではなく、十一以上だという命題があるそうです。

「十一十一十一十一十一十一十一十一十一十一」

まさに、和を科学的に考えて言えることだと思われま

す。そういえば、七世紀初頭、聖徳太子が制定した十七条の憲法にも、「和をもって貴しとなす」との条文が、第一条に示してあることを思い出します。我々人間にとって大切にしたいことだと思えます。

しかし、

「和を知りて和すれども礼を以て之を節せ

ざれば亦行うべからざるなり」

【学而】

「知_レ和而和、不_レ以_レ礼節_レ之、亦不_レ可_レ行也。」
〈(孔子の弟子の有司が言つ、)和の大切さを知って和しても、礼という適切な節度で調和しないと事はうまくいかない〉

と説いています。様々な組織の中で、事を為す時、和み親しみとしても押れあいに陥るのではなく、お互いを尊敬し合う礼の根本精神がなければうまくいかない、とも説いているのです。そして、『中庸』では

「君子は和して流れず。強なる哉、矯た

り」

と多くの人と和しても、偏ることがない、なんと強いことではないか、と説いています。また、用いられようと用いられなくても、自分の志は変わらない、なんと強いことではないか、と説いています。和しても同調、付和雷同、忖度はしないことの大切さを説いています。

結局、組織で事を為すとき、一人一人の主眼的な態度と技術などの力量のみでなく、自分の立ち位置を自覚し認め合い話し合い新しい景色をみようとの確固不拔の共通目標を達成するべく成長しながら和すると、事は大きく成すことができるし各自が成長できるということではないでしょうか。

皆様のお導きをよろしく願います。